



©Nicolas Tavernier

レ・ヴァン・フランセ 2018年日本公演スケジュール

4月20日(金)	東京	文京シビックホール 大ホール	主催：文京シビックホール[(公財)文京アカデミー]
4月21日(土)	東京	三鷹市芸術文化センター 風のホール	主催：(公財)三鷹市スポーツと文化財団
4月22日(日)	名古屋	日本特殊陶業市民会館 フォレストホール	主催：CBCテレビ・名古屋市長
4月23日(月)	東京	東京文化会館	主催：(公財)都民劇場
4月24日(火)	東京	東京オペラシティ コンサートホール (協奏交響曲の夕べ)	主催：ジャパン・アーツ 共催：(公財)東京オペラシティ文化財団
4月25日(水)	茨城	水戸芸術館 コンサートホールATM	主催：(公財)水戸市芸術振興財団
4月26日(木)	兵庫	川西市みづなかホール	主催：(公財)川西市文化・スポーツ振興財団
4月28日(土)	福岡	福岡シンフォニーホール	主催：TVQ九州放送、(公財)アクロス福岡、朝日新聞社

協奏交響曲の夕べ

Program

ブレイエル：フルート、オーボエ、ホルン、バスソンのための

協奏交響曲 第5番 ヘ長調 B.115

I. Pleyel: Sinfonia Concertante No.5 for Flute, Oboe, Horn, Basson and Orchestra in F Major, B.115

- | | |
|---------------------------|---------------------------------------|
| 第1楽章：アレグロ・コン・プリオ | 1st Mov.: Allegro con brio |
| 第2楽章：テンポ・ディ・メヌエット、グラツィオーソ | 2nd Mov.: Tempo di Minuetto, Grazioso |
| 第3楽章：プレスト | 3rd Mov.: Presto |

ダンツィ：フルートとクラリネットのための

協奏交響曲 変ロ長調 Op.41

F. Danzi: Sinfonia Concertante for Flute, Clarinet and Orchestra in B-Flat Major, Op.41

- | | |
|-------------------|---------------------------------|
| 第1楽章：アレグロ・モデラート | 1st Mov.: Allegro moderato |
| 第2楽章：ラルゲット | 2nd Mov.: Larghetto |
| 第3楽章：ポロネーズ、アレグレッタ | 3rd Mov.: Polonaise, Allegretto |

ドヴィエンヌ：フルート、オーボエ、ホルン、バスソンのための

協奏交響曲 第2番 ヘ長調

F. Devienne: Sinfonia Concertante No.2 for Flute, Oboe, Horn, Basson and Orchestra in F Major

- | | |
|---------------|-----------------------------------|
| 第1楽章：アレグロ | 1st Mov.: Allegro |
| 第2楽章：アダージョ | 2nd Mov.: Adagio |
| 第3楽章：メヌエットと変奏 | 3rd Mov.: Minuetto con Variazioni |

モーツァルト：オーボエ、クラリネット、ホルン、バスソンのための

協奏交響曲 変ホ長調 K.297b

W.A. Mozart: Sinfonia Concertante for Oboe, Clarinet, Horn, Basson and Orchestra in E-flat Major, K.297b

- | | |
|------------------|------------------------------------|
| 第1楽章：アレグロ | 1st Mov.: Allegro |
| 第2楽章：アダージョ | 2nd Mov.: Adagio |
| 第3楽章：アンダンティーノと変奏 | 3rd Mov.: Andantino con Variazioni |

レ・ヴァン・フランセ

フルート／エマニュエル・パユ
オーボエ／フランソワ・ルルー
クラリネット／ポール・メイエ
ホルン／ラドヴァン・ヴラトコヴィチ
バスオン／ジルベール・オダン

東京フィルハーモニー交響楽団

Les Vents Français

Emmanuel Pahud, Flute
François Leleux, Oboe
Paul Meyer, Clarinet
Radovan Vlatkovic, Horn
Gilbert Audin, Basson

Tokyo Philharmonic Orchestra

Program Notes

18世紀後半から19世紀初頭にかけて流行した協奏交響曲、すなわち複数の独奏楽器とオーケストラのための協奏曲。この楽曲形式を語る上で欠かせない存在が、パリの地で1725年に始まり、フランス革命で中断を余儀なくされるまで続いた演奏会シリーズ“コンセール・スピリチュエル”である。そのステージでは特に1770年代以降、上記の“サンフォニー・コンセルタンテ”が名人たちの妙技を楽しませるプログラムの華として人気を博し、他の音楽都市にも少なからず感化を及ぼすに至った。本日の演目でもドヴィエンヌとモーツァルト（紛失したとされる原作）がコンセール・スピリチュエルと関係を持っている。

そんな作品に21世紀の空気を呼吸させる上で、パリという街に縁を持つレ・ヴァン・フランセこそは最高の適任者に他ならない。様々な楽器の組み合わせから得られる万華鏡のごとき色彩感に至るまで、協奏交響曲の醍醐味をご堪能あれ！

イグナツ・ブレイエル（1757～1831）

フルート、オーボエ、ホルン、バソンのための協奏交響曲 第5番 ヘ長調 B.115

ブレイエルはオーストリアに生まれ、ハイドンに師事した経歴を持つ作曲家だが、1783年にストラスブルグへ居を移して以降はフランスを活動拠点とした。革命後の一時期はロンドンに身を置いていたが、1795年にパリへ戻ってからは楽譜出版業にも手を染め、1807年にはピアノ工房を構えるなど、経営者の才覚も目をひく人物だ。

協奏交響曲というジャンルに、彼は1786年から1805年にかけて6つの作品を残した。その最後期に位置するのが、本日取り上げられるヘ長調の作品である（出版は1802年ないし1805年）。第1楽章を開始するオーケストラの導入部は比較的短いが、次々と繰り出される動機群は性格的な対比感に富む。続く楽章主部では、その導入部から派生したモチーフによって4人のソロイストが充実した対話を繰り広げていく。第2楽章はオーボエが先導する主題に始まるロンド。独奏楽器群によるフーガ風の展開も挟みながら春爛漫という風情で曲は進み、そこから切れ目なく続く第3楽章は、実質的にはメヌエットの素材を活用したコーダにあたる。

フランツ・ダンツィ（1763～1826）

フルートとクラリネットのための協奏交響曲 変ロ長調 Op.41

18世紀中葉に欧州随一との評価を受けていた宮廷楽団を擁するマンハイムの地に育ち、15歳でその宮廷楽団に迎えられたダンツィは、1784年に父の後任としてミュンヘン宮廷楽団の首席チェリストに就任。同地で副楽長の地位まで得た後は、シュトゥットガルトの宮廷楽長を経て、1812年から世を去るまでカールスルーエの王立音楽院に奉職する。このカールスルーエ時代にダンツィは23歳年下のウェーバーと出会って才能を認め、互いに啓発し合う間柄となった。ダンツィの作風が古典派の様式に根ざしながらも、やがて花開く初期ロマン派音楽の香りを萌芽として宿しているのも故なきことではない。

木幡 一誠（音楽評論家） Issay Kohata

この協奏交響曲Op. 41は1814年の所産。第1楽章では均整のとれたフォルムの中に、オペラの舞台にも通じるロマンティックな劇性や感情表現が秘められ、続く第2楽章における独奏楽器の応唱も同様の情調を醸し出す。技巧的なフィナーレをなす第3楽章にボロネーズのリズムを配するのは往時の流行でもあり、同時期に書かれたウェーバーのクラリネット協奏曲にも例が認められる。

フランソワ・ドヴィエンヌ（1759～1803）

フルート、オーボエ、ホルン、バソンのための協奏交響曲 第2番 ヘ長調

フランス北東部のジョアンヴィルに生まれたドヴィエンヌは地元で音楽教育を受けた後、1779年にはパリ・オペラ座のバソン奏者となった。そのかわりフルートも習得し、高度な技量を身につける。コンセール・スピリチュエルの公演ではフルートとバソンの両方で十数回にわたりソロイストをつとめており、自作の協奏交響曲でも喝采を博していた。フランス革命後の1795年にパリ音楽院が組織された際、その初代フルート科教授に就任したのも彼だった。

1791年の出版時に第2番という通し番号が与えられたヘ長調の協奏交響曲は、“フランスのモーツァルト”とも称されるドヴィエンヌらしい、典雅な旋律美が魅力を放つ作品だ。自らの楽器だったフルートとバソンはもちろん、後にパリ音楽院の同僚として交わったと思わせる名手たちを念頭に置いたパッセージが、第1楽章では百花繚乱的な空気感を演出していく。ごく簡潔にまとまった第2楽章はヘ短調に転じており、その最後に置かれた推移句を経て、オーボエがメヌエットとして書かれた第3楽章のテーマを提示。続く5つの変奏は主役の楽器を交代させながら進み、全員揃い踏みものコーダが嬉々とした面持ちで曲をしめくくる。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）

オーボエ、クラリネット、ホルン、バソンのための協奏交響曲 変ホ長調 K.297b

1778年の4月、パリに滞在中のモーツァルトはコンセール・スピリチュエルの演奏会で披露するため、フルートとオーボエとホルンとバソンのための協奏交響曲を書き上げた。しかしなぜかお蔵入りとなり、興行主へ渡してしまった譜面は行方不明のまま……。1870年になってモーツァルトの伝記作家オットー・ヤーンの遺品から、本日も演奏される管楽器のための協奏交響曲の筆写譜が発見されたが、しかし編成は上記のとおりフルートではなくクラリネットを用いたものだった。それゆえ偽作説も唱えられているが、モーツァルトのオリジナルに基づく譜面が何らかの経緯で現在の形に編み直された可能性も否定はできない（フルートを用いた編成の“復元版”を作成した音楽学者ロバート・レヴィンも、ソロパートがモーツァルトに由来する点は疑いなしとしている）。

しかし聴き手にとって、作品の真贋論争は二次的な問題にすぎない。協奏ソナタ形式の枠組を端正に生かしながら、4つの楽器に対して実に魅力的な技巧的楽句を与えていく第1楽章。瑞々しい歌心と対話的書式の深みを兼ね備えた第2楽章。そして主題と変奏をつかさどる一連の流れが心そる充足感を宿す第3楽章……。どう低く見積もっても、これはアマデウスの名を汚さぬ名品である。